

ですが、いろいろな病気になり、手術も数回いたしました。現在も後遺症で悩んでおります。

昭和二十二年五月二十五日、栄養失調のためテルマ収容所を出発して、ナオトカ港でしばらく築港作業をいたして、六月十二日ナオトカ港で興安丸に上船、六月十六日舞鶴に上陸す。

凍土の中の友

新潟県 田村 恭 一

北へ北へと航行し出した船に私たちの故国へ帰りつく夢は無惨に破れ去った。

北海道の港へ輸送してくれるなどありましたのだ。

船内は騒然としたがいかなともしがたい。

薄暮、船は小さな港へ入った。すべてのものが貧しい異国の風景であった。

何のためか懐かしい歌謡曲の「湖畔の宿」をポリウームをいっぱい上げて流していた。

暗くなった埠頭に照明灯がつき下船が始まった。ソ連の哨兵（カンボーイ）が『捕虜々々ベストレベストレ』とドスを利かした声で、絶え間なくどなっていた。

『畜生だましやがって、火事場泥棒奴』

『我々をこの地で労役に使う気だナ』

ふんまんやる方ないが指示どおりの行動をせざるを得ない。やがて長く連結したオンボロの貨車にすし詰めになり、汽車はノロノロと出発した。どうなるのであろう、これからの運命を考えているのだろう、お通夜のような沈黙が続く。汽車は時折停まって長い時間をかけ一団の兵たちが降ろされた。

『オーツ頑張れよ元気でナ』これしか言葉はなかった。夜が明けると、沿線に早く運ばれた連中が仕事をしていて私たちに手を挙げている。たばこをくれという合図をしている兵隊もいた。私の隊はトモンというちっぽけな町に下車させられた。たしか第二十八ラゲリだっただと思う。建物はなく、幾つかの幕舎に枯れ草を敷いたのがこの日からの宿であった。

九月というにすごい寒さで、抱き合って寒さには耐え

た。食事は携行した米や缶詰であったが、二、三日でなくなり、ソ連給与のカルタほどの黒パン、飯ごうのふたで半分くらいのスープでは、食べたあとすぐ腹が減った。

働かざる者食うべからず——の国だ。翌日から自分たちが困られるラーゲリづくりのため山中に入り材木作業。自動小銃（マンドリン）を首からつるした哨兵がベストレ、ベストレ（早く早く）を連呼して追いたてるように働かせる。少しでも反抗の態度をすると銃を向けてこづく。ノルマを課せられた重労働。すごい寒さ最悪の食事に私たちの体力は急速に衰えた。

大地がすっかり凍り雪も降り出したところから、栄養失調のあまり死んで行く者がふえ出した。眠る前に『ああ腹いっぱいばた餅を食いたいなア』などしゃべって寝た者が、翌朝は死んでいた。ほとんどがこのような亡くなり方だった。

このような結末が明日我が身にもくるかもしれないと悲観的になれば、体はますますつらくなる。『くそっ、こんなところで白樺の肥やしになってたまるか』生きてい

た者一同は誓い合ったが、それとて帰還の日はいつのか、死ぬまでこき使われるのか、皆目希望も当てもない毎日であった。

材木で散々苦勞して、今度はその材木を山中からそりを馬に引かせ搬出する仕事になった。馬は十五頭くらい用意されており、各人専用馬は決めてなかった。

ある日、私は片方の眼だけの馬を引いたときのことである。この馬は力はあるが片目のため、見える方へ行きがちで、綱をガッチリ引いていないと林の中へでもかまわず走りこむ馬だった。下りの長い坂道の途中で私のちょっとした油断で大きな切り株に乗り上げ、馬もそりも転倒した。哨兵がすっとなで来て、真っ赤になって怒り出しどなった言い分は、『貴様らヤンボンスケなど十人や二十人死んだってどうこうないが馬は国の宝だ』そして私は銃でたたかこづかれた。馬は幸い何の怪我もなかったが。

捕虜の哀れさ口惜しさに身の置き場もなかったことを思い出す。ただし馬糧の燕麦を失敗していつて食べた一つのよさもあったが、口のまわりを真っ黒にして山を

上ったり下ったり、木の根につまづいて何度も転倒し、夕方になると馬に追いつけぬほどに疲れた。

ある晩、哨舎の自動小銃がけたたましく鳴った、さてはだれか脱走をはかったのか。全員人員点呼の結果一人不足、翌朝その若い少年兵だった彼は生きる希望も何も捨て、地獄の苦しみから逃れるため、廃屋の馬小屋に首をくくって帰らぬ人となっていた。

次には春になってからのこと。空腹のあまり湿原に茂っていた野草を二人で食べて物凄い苦しみで毒死したり、馬鈴薯を生かじりして中毒死した人もあった。我が方の軍医殿も数人いたが、何の薬もないことには、見えて息を引きとる立ち合いしかなかった。最後に小さな声で『おかあさん』とかすかに言って死んでいった東京生まれのその人を忘れることはできない。

書いた例は私のラーゲル五百人程度の中での出来事であり、それすら全部ではない。望郷に食いがれ無念の死を遂げたこれらの人たちはどこへ埋葬されたか知らない。多分トモニ河畔の白樺の林の中に眠っていると思う。

茫々四十年の歳月は過ぎたが、私は生きてる限りこの悲惨さを忘れないであろう。

シベリアに抑留されて

新潟県 矢部 松二郎

第一部

戦争あれから四十三年、今でも思い出すと胸がつかまる。「あれが夢であればいいが」そんな生やさしいものではない。戦争は悲惨で恐ろしいの一語に尽きる。

昭和十九年三月応召、九州は下関から船に乗り、釜山經由で旧満州のハルビン阿城第一〇二二部隊に配属され、昭和二十年八月十九日引揚げ途中の開拓団から、無条件降伏を知らされた。その後、何者か、恐らく旧満州人の襲撃に遭う。山中をさまよい歩き、ようやくハルビンにたどりつき、武装解除を受ける。このときからソ連軍給食となる。

ある日突然、「全員集合」の号令が鳴り響く。各中隊ご